

[在外研究 2002 - 2003 報告書]

情報化社会における人類学民族学コレクション

情報デザイン学科 港千尋

はじめに

2002年7月中旬から2003年3月下旬のあいだに行った在外研究のテーマは、『情報化社会における人類学民族学コレクションのありかた』であった。世界には一般的に人類学民族学コレクションと呼ばれる資料とその保存施設が数限りなく存在する。私的なコレクションにはじまり、民間によるものや地方公共団体などによるもの、そして大学をはじめとした各種の研究機関によるものなど、規模においても運営形態においても非常に大きな幅があるが、それらのなかにはいくつかの共通する特徴も可能である。ひとことで言えば、19世紀西欧文明が生んだ人類学と民族学が内包している、記憶と想像力のスタイルが、これらのコレクションに共通する性格を与えている。ひとつは博物館の前身となった私的コレクションと近代科学の母体となった博物学に由来する「雑種性」であり、もうひとつは植民地主義が生んだ「オリエンタリズム」あるいは「コロニアリズム」である。調査したコレクションは多かれ少なかれ以上のふたつの性格をもっており、それらをそのまま継承しているところもあれば、批判的に捉えなおしてコレクションの再解釈と再配置を試みているところもある。

多様化する人類学民族学コレクション

まず調査対象となった機関を訪問順に列挙する。

オックスフォード大学自然史博物館（英）
ピット・リヴァース博物館（英）
アシュモレアン博物館（英）
オックスフォード大学科学史博物館（英）
大英博物館（英）
スローンハウス博物館（英）
ヴィクトリア&アルバート博物館（英）
フロイトハウス（英）
ウィーン自然史博物館（オーストリア）
パリ人類博物館（仏）
アフリカオセアニア民族博物館（仏）
アルラタン民俗学博物館（仏）
バスク民族学博物館（仏）
ダーレム民族学博物館（独）
ベルリンコミュニケーション博物館（独）
ボン民族博物館（独）

ジュネーブ民族学博物館（スイス）
バーゼル民族学博物館（スイス）
バーゼル市歴史博物館（スイス）
フィレンツェ人類学民族学博物館（イタリア）
ローマ人類学民族学博物館（イタリア）
ポンピドゥーセンター（仏）
パリ音楽博物館（仏）
ヨーロッパ写真美術館（仏）
パリ市歴史博物館（仏）
ブリティッシュコロンビア人類学博物館（カナダ）
デリー国立博物館（インド）
シドニー国立博物館（オーストラリア）
国立図書館（オーストラリア）
オセアニア民族学博物館（仏）

情報化社会のコレクション

今日、インターネット上にホームページを持たない美術館や博物館はないと言ってよいだろう。初めて常設展を訪れる人も、また特別展を見に行く人も、まず自宅でホームページを見てから、企画の内容やアクセスを確認することが多くなっている。現代社会の情報化の一例にすぎないが、それにしてもここ十年間の変化はめざましい。一般の観客だけでなく、専門的な研究目的のために、現在、多くの博物館がそのコレクションのデータベース公開をめざしており、簡単な問い合わせならメールで、ということも多くなった。インターネットによって美術館や博物館の機能が拡張するかもしれない。

コンピューターと通信技術の飛躍的発展による社会の情報化を「狭義の情報化」とするなら、それと密接に結びついた「広義の情報化」が進行中であるように思う。情報化は偏在している情報を相互に結びつけ、交換を容易にする。こうした水平的情報化にはもちろん知的交流も含まれるが、そのいっぽうで個人にかんする情報が一元的に管理される可能性をひらき、規格化・画一化を生み出すことになる。これにたいして特定の集団はネットワークを利用し、集団に関する情報を共有することによって、独自の価値を有することを望みながら、社会を多元化へと導く。前者を水平的な結びつきとするならば、後者は集団的な記憶の形成にかかわるという意味で、垂直的な結びつきと言えるかもしれない。一見して相反するふたつの動きは、どちらも「狭義の情報化」を背景にし

ながら、社会の記憶に影響を与える「広義の情報化」としてとらえることができる。これは情報化にともなって進行する、「記憶の再編成」とも言うべき、大きな流れである。ここではオックスフォード大学社会文化人類学研究所における在外研究の一環として行った、代表的な人類学博物館であるピット・リヴァース博物館と、パリの人類博物館について、コレクションの再編成という観点から考察してみたい。2002年から2003年にかけて、これらのふたつの人類学博物館は、「再編成」という観点からみると、ある意味で対照的な道を辿ることになったからである。

雑種性とオリエンタリズム

ピット・リヴァース博物館は1884年、ピット・リヴァース長官がオックスフォード大学に寄付をしたコレクションが基になってできた博物館である。現在はオックスフォード大学付属自然史博物館に併設される形でオープンしている。創設された時点でのコレクションは1万8千点の、主に考古学と民族学の資料から成っていたが、その後多くの寄付によってコレクションは増え続け、現在は50万点を超える世界有数のコレクションとして知られる。キャプテン・クックの第二回航海で持ち帰られた南太平洋の衣服や民具、ナーガ（インドとビルマの国境）の民族学的資料、アフリカ、南アメリカの土器などをはじめとするコレクションは、19世紀後半から20世紀前半にかけての初期の人類学者によって集められたものを中心としている。これに加えて初期の人類学写真のコレクションも充実しており、内外から研究者が訪れている。また建物も展示スタイルもヴィクトリア朝の様式をほぼそのまま残し、19世紀における人類学的空間がどのようなものであったかを知ることのできる、数少ない例として、つまり「博物館の博物館」としても貴重な存在である。

多くの人類学博物館が、そのコレクションを地域別あるいは文化別に展示しているのに対し、ピット・リヴァースは「タイポロジー」という独特の分類展示方式を採用している。これは創設者であるピット・リヴァース自身の考案によるもので、自然史博物館が採用している進化論的な分類による展示と似た、分類法である。19世紀後半のヴィクトリア朝文化において、社会進化論的な分類法が生まれても不思議はない。ピット・リヴァースだけが社会進化論的な見方を採用していたわけではないが、第二次大戦後多くの博物館がその展示法を変えてゆくなかで、あえてオリジナルの展示法を保存しつつ、それを批判材料として活用しているところに、ピット・リヴァース博物館の特徴があると言える。

19世紀後半の帝国主義・植民地主義拡大の時代にできた世界観が、いわゆる「ポストコロニアル」批判をとおして脱構築されていったことは、博物館のあ

りかたにも有形無形の影響を与えた。昨年亡くなったエドワード・サイドが批判の理論的支柱のひとりであったことは言うまでもない。そのなかで多くの人類学博物館はいかにしてポストコロニアル批判に応答しつつ、19世紀的「遺産」を継承してゆくかを模索していたが、ピット・リヴァース博物館は、形のうえではそのまま植民地時代のスタイルを継承しつつ、地域別・文化別の展示では見えてこない、人間とモノとの関係を展示してきている。それはコレクションが、ただのモノの集積ではなく、その背後にはそのモノを収集し整理し保存した人間の思想があり、コレクションとはそれらの思想のコレクションでもあるという考え方があるからだろう。コレクション、企画展示、教育プログラムといった異なる活動において、そのことは意識的に実践されている。それはとりもなおさず19世紀の「遺産」をもつ人類学博物館の活動は、そのままポストコロニアル批判の実践とならざるをえないことを示しているといえる。

オンラインの活用

ピット・リヴァースは英国政府をはじめとするいくつかの公的基金の援助を受けて、1999年にカタログのコンピュータ化を開始した。以降コレクションのデータベース化を積極的にすすめて、オンライン検索のシステムを模索しながら2002年3月に実用化にこぎつけた。実用化がちょうど筆者の在外研究期間にあたったため、それまでのマニュアルカタログとオンラインカタログの両方を見ながら、情報化の実際的な面を見ることができたのは幸運であった。

現在はコレクションをモノと写真に分けて、それぞれ独立したオンラインカタログを公開している。オンライン化プログラムは、博物館運営の円滑化とともに内外の研究者からも評価されており、実用化されてからは、これを利用して可能になった活動が目立つ。このカタログは、

- 1 文字情報に特化し、イメージデータは掲載していない。

- 2 明確な情報がない場合でも検索が可能のように、複数のキーワードを設けている。

ことなどを特徴としている。いま試しに両方のカタログに Japan と入力し検索してみると、モノのほうでは総数 197,599 点のうち 5,201 点が一致する。写真のほうでは総数 48,456 点のうち 1,224 点が一致する。オンライン化はコレクション全体には及んでいないが、かなりの数にのぼっていることが分かる。イメージを加えるとデータが巨大になってしまうために、あえて文字情報だけを表示し、そこから先は個別の調査ということになる。しかし個々のコレクションに関するデータは詳細で、収集の日付からはじまり、収集物の由来、特徴、収集者によるノートがある場合はその電子テキスト、参考書、関連データ等まで付け加えられており、研究者にとっては大きな助けとなる。実際研究者はまずオンラインで調べてから問い合わせることが通例となりつつあり、筆者も活用

して得るところが大きかった。

オンライン化と平行して、内外の研究者によるプロジェクトや企画展の内容がホームページ上で公開されている。ピット・リヴァースのコレクションを母胎とする人類学と芸術双方にわたる研究活動をサーブスペース上で行うことによって、19世紀的なモノの世界とパラレルに存在する、21世紀型の研究空間を作ろうとしているのである。

ある民族学コレクションの終焉

ある意味でこれと対照的な流れを辿ることになったのが、パリの人類博物館の民族学コレクションだったといえるだろう。「ミュゼ・ド・ロム」の名で親しまれたこの博物館は、パリ万博の際に建てられたトロカデロの丘にそびえるパレに、今もある。しかしその博物館のなかでもっとも有名で、しかも市民からも親しまれていたアフリカやアメリカをはじめとする膨大な量の民族学コレクションはいまはない。これは民族学部門が2007年頃を予定として構想されている「ブランリー博物館」へ移転するため、2003年3月をもって永久に閉鎖されたためである。すでに移転計画の公表の段階から、フランス国内ではこれに反対する運動が起き、メディアをつうじてひとつの「事件」としてとりあげられていた。70年におよぶ歴史をバックにして先日亡くなった著名なドキュメンタリー監督ジャン・ルーシュも先頭に立って抗議集会が開かれていたが、政府の決定はついに動かず、ミシェル・レリスやクロード・レヴィ＝ストロースといった、フランス民族学の代表的な人物たちが収集したコレクションをもつ機関は、その場所の記憶を失ったのである。

運がよいのか悪いのか分からないが、はからずもひとつのコレクションの「最期」を内部から見届けることになった。もちろんこうした大きな組織の移転にまつわる理由はひとつではありえない。政治レベル、経済レベルでのさまざまな動きが最終的に閉鎖と移転というかたちになったのだろうと思うが、「情報化社会におけるコレクション」という観点から見た場合、閉鎖と移転には重要な論点を読み取ることができるように思う。ここでは冒頭で述べた「雑種性」と「コロニアリズム」に絞って2点だけ指摘しておきたい。

民族学コレクションの「雑種性」は、それが単に世界各地から集められているというだけでなく、フィールド調査の過程で収集されたものもあれば、骨董商から買い上げたもの、あるいは寄贈されたり委託されたものもあるというように、その履歴が雑多であるという理由にもよる。それらのモノに、「民族学的な価値」を付与したのは、あくまで西欧の学者や探検家たちであり、モノが本来帰属していたそれぞれの社会では、宗教的なオブジェであるものもあり、装飾芸術として作られたものもある。この点でも「雑種性」は、たとえば近代美術

館のコレクションなどよりもはるかに際立った特徴であると言えるだろう。

人類博物館の民族学コレクション移転問題が示しているのは、こうした本来の雑種性を否定して、それを「芸術」というコンテキストのみに嵌め込むことを意味している。というのも新博物館は、人類学や民族学のための施設ではなく、コレクションの美学的価値を中心にして編成されるものと予定されているからである。ここでの「美学的価値」が、あくまで西欧中心の「美学」であることは言うまでもない。その意味で閉鎖と移転に「ネオコロニアル」の性格を指摘する批判が寄せられていたことは、それなりに意味をもつ。

研究者にとっては好ましいことではない。美学的な価値のみを認められたコレクションは、美術館の環境のなかではアクセスできても、もはや科学的な研究の対象とはみなされない可能性がある。研究の対象ではなく、鑑賞用となるからである。ここに、モノから出発するような「具体の科学」が、社会の情報化のなかで廃れてゆく気配を感じるのは、ひとりわたしだけではないと思う。

おわりに

在外期間が同時多発テロからイラク戦争開戦にいたる期間に重なったために、予定の変更があいついでしまったのは残念だった。特にアフリカ・中東は、研究機関の一時的閉鎖や治安悪化と渡航自粛勧告のために、延期せざるを得なくなった。対立と紛争が拡大する世界にあって、しかし「すべての文化」を対象としている民族学コレクションが相互理解と交流のために果たす役割は、小さくない。というよりも、植民地主義時代の「落とし子」として残されたこれらの資料体に、人類が自分自身の姿を知るための真の価値を発見するのは、これからの作業である。そのために情報デザインという観点から、諸文化の記憶と想像力をどのようにグローバル化する社会のなかで生かしてゆくかを探ることが切に求められていると言えよう。